

花月菴鶴翁と煎茶道のはじまり

東京文化財研究所

研究員 安永 拓世

はじめに

◆田中花月菴鶴翁(1782～1848)とは

天明2年(1782)に、大坂島之内小西町の酒造業者の子として産まれた。幼名は亀之助。16歳で家業を継ぎ、襲名して新右衛門と称す。名は賀寿。菊井館、毛孔、三種亭などとも号した。文政年間(1818～30)ごろから黄檗僧のもんちゆうじょうふく間中 浄復(1739～1829)に師事して禅と煎茶を修め、文政7年(1824)ごろには煎茶家として独立したと考えられている。その後、天保3年(1832)には江戸へ行き、將軍であるとくがわいえなり徳川家齊(1773～1841)へ献茶したほか、綾瀬川に舟を浮かべて茶席を設け、たにぶんちよう谷文晁(1763～1840)をはじめ、おおくぼしづつ大窪詩仏(1767～1837)やひらたあつたね平田篤胤(1776～1843)を招いたという。翌天保4年(1833)に中国西湖の水を長崎奉行を介して入手し、8月中秋にこれを用いて観月の茶席を開いた。また天保9年(1838)4月にはいちじょうただか一条忠香(1812～63)に招かれて献茶し、「鶴翁」の号を授かり、同年9月再び一条忠香に招かれ「煎茶家元」の染筆『紫の巻』を賜る。同年同月に、紀伊徳川家と尾張徳川家、同年10月にはちぐさありこと千種有功(1796～1854)のもとで献茶。天保10年(1839)4月に興正寺で、同年8月中秋に法隆寺太子殿で、天保11年(1840)11月には一条忠香の招きによりせんとうごしよ仙洞御所へと献茶を重ね、煎茶の家元として確固たる地位を築いたが、嘉永元年(1848)、67歳で没している。

◆鶴翁の知名度

- ◇文政年間(1818～30)ごろから著名な存在となる
- ◇天保年間(1830～44)ごろには煎茶の「宗匠」として認知される
- ◇鶴翁は当時の大坂で中心的な煎茶家

◆鶴翁が家元になり得た要素

- ◇ばいさおう こうゆうがい売茶翁(高遊外、1675～1763)からの系統の正統性
- ◇器物の収集・所蔵・伝来
- ◇法式・点前・茶会などの整備

1. 売茶翁の神格化

◆売茶翁とは

江戸時代中後期に活躍した^{おうぼくしゅう}黄檗宗の僧侶。本名は柴山元昭、幼名は菊泉。法名は月海、高遊外とも称した。延宝3年(1675)、肥前国蓮池の生まれ。鍋島藩の支藩である蓮池藩に仕える御殿医の^{しばやまのくのしんつねな}柴山杳之進常名(1632~?)の三男として生まれる。11歳で出家し、肥前の龍津寺の^{けりんどりゅう}化霖道龍(1634~1720)について禅を学ぶ。13歳で師とともに宇治の萬福寺を訪れ、^{どくたんしょうけい}独湛性瑩(1628~1706)から^げ偈を与えられる。20歳代には諸国を遊歴し、各地の名僧を訪ねて修行を重ねるが、その後、肥前に戻って14年ほど化霖に仕えた。57歳で師の化霖が亡くなると、龍津寺を法弟の^{だいちょうげんこう}大潮元皓(1676~1768)に任せて京都に出る。61歳で、東山に通仙亭を開き、自ら茶道具を担いで簡素な席を設け、客に煎茶を出した。70歳で一度帰郷し、還俗して高遊外と名乗り、鍋島藩の許可を得て再び京都へ出る。宝暦5年(1755)、81歳になると売茶活動を廃止し、愛用の茶道具を焼却する。以後は、揮毫で生計を立てていたが、宝暦13年(1763)、87歳で蓮華王院の南にある幻々庵にて没する。

◆売茶翁に対する認識

◇『売茶翁偈語』(宝暦13年(1763)刊行)

売茶翁の行動や人物への関心と高い評価

ただ、この段階では煎茶と結びついて語られてはいない

◇初期の煎茶書

売茶翁に関する記述がほとんど登場しない

◆煎茶趣味における売茶翁の重要性が上昇

◇『近世畸人伝』(寛政2年(1790)刊行)の影響

^{けんかどうしよぞうばいさおうちやくずはっぴん}「兼葭堂所蔵売茶翁茶具図八品」が掲載

煎茶と売茶翁が密接に結びついて語られるようになる

◇煎茶の「中興」「茶神」としての売茶翁

^{せんぢやはやしなん}『煎茶早指南』(享和元年(1801)刊行)、^{ちやかすいげん}『茶癡醉言』(文化4年(1807)ごろ成立)など

◇売茶翁の系譜化

売茶翁とみずからを結びつける

売茶翁—聞中浄復—花月菴鶴翁

2. 器物の伝来と煎茶道具の製作

◆器物の伝来

◇唐物の器物への高い関心

中国趣味を背景に展開した煎茶趣味

「万暦・嘉靖・宣徳・成化等の製」など明末清初の器物を尊重

◇売茶翁の茶道具の紹介

『近世畸人伝』への掲載

大坂を代表する文人である木村兼葭堂(1736~1802)が所蔵

◇売茶翁から伝来した茶道具の価値の上昇

売茶翁の神格化との相乗効果

『売茶翁茶具図』(文政6年(1823)刊行)…所蔵先には花月菴も散見

◆煎茶道具の模造・製作

◇煎茶道具の基本形の成立

売茶翁の茶具が煎茶道具の典型となる

「売茶翁形」「高翁好み」

◇典型的な煎茶道具の模造

初代清水六兵衛(1738~99)

木米(1767~1833)

初期の煎茶道具には花月菴が作らせたものも多い

◇煎茶道具の一般的な販売・流通

『煎茶早指南』

煎茶道具の需要の高まり

3. 法式・点前への関心

◆煎茶には定まった法式がない

◇茶の湯への批判

茶の湯は法式や点前に拘泥

法式に拘束されて身動きがとれない

◇煎茶の法式は自在

法式にとらわれない自由さ

「次第階級」がなく、「杜撰」

◇法式の必要性

法式がないと、「一時之流行」に終わってしまう

茶の湯の法式を積極的に摂取

◆茶の湯との関わり

◇茶の湯批判の克服

茶器や点前の不衛生さ

粗末を喜ぶ浅はかさ

→煎茶では清潔さ、新しさを重視

◇茶の湯よりも古い中国の茶への回帰

抹茶は中国の宋時代以後

陸羽^{りくう} (733~804) や盧全^{ろどう} (?~835) …宋時代以前の唐時代の茶

◇茶の湯からも学ぶ

茶の湯を否定するわけではない

茶の湯のメリット・デメリットを明確に

上田秋成^{うえだあきな} (1734~1809) 筆「茶は煎を貴とす」

◇茶の湯からの移行者を意識

茶の湯愛好者を念頭にした煎茶書の記述

増山雪斎^{ましやませつさい} (1754~1819)、田能村竹田^{たのむらちくでん} (1777~1835) など煎茶書の筆者も元は茶の湯を嗜む

おわりに

◆鶴翁の先見性

◇売茶翁の茶道具の収集・伝来

木村兼葭堂との関わり

兼葭堂からの器物の伝来が重要

◇煎茶道具の注文製作

初代清水六兵衛

木米

◇煎茶道への希求の高まりに応える

時代のニーズに敏感に反応

応えられるだけの素養や知識、人脈

◆鶴翁の豊富な人的ネットワーク

◇文人とのネットワーク

谷文晁、大窪詩仏、平田篤胤、田能村竹田

◇武家とのネットワーク

徳川家斉、紀伊徳川家^{とくがわはるとみ} (徳川治宝 (1771~1852))、尾張徳川家^{とくがわなりはる} (徳川斉温 (1819~1839))

長崎奉行^{おおくさたかよし} (大草高好 (?~1840)、あるいは^{まきの なりふみ} 牧野成文 (?~1837))

◇公家とのネットワーク

一条忠香、千種有功

◆花月菴流のすばらしさ

◇売茶翁から脈々と続く正統性

◇日本において最も古く、最も由緒のある煎茶の流派

◇煎茶道具の名品を堪能できる